

歌を使った日本語文法教育(9) —「て形の歌」について—

溝口 博幸 *

Japanese Grammar Education Using Music (9) “Te-form Song”

Hiroyuki MIZOKUCHI

Abstract: "Te-form" is taught from the first stage of the beginner's course. Instances are in directions of classroom activities such as "Mite kudasai (Please look).", "Kaite kudasai (Please write).", "Yonde kudasai (Please read).", and "Itte kudasai (Please say)." These are polite requests using "Te-form".

Upon requests from several users of this program, a new version of the original "Te-form Song" was created to deal with verbs. Verb Group I is treated in Verse 1, Group II and Group III verbs are dealt with in Verse 2. "Te-form Song" is also effective as an affective strategy and a memory strategy, supported by Oxford (1990).

"Te-form" is also used in expressions of continuing, trying something, and transferring benefits. Through various activities and quizzes, learners can learn to understand the structure between verb stems and suffixes and how to make "Te-form".

Keywords: *Te-kei (Te-form), affective strategy, memory strategy, learning "Te-form" through doing quiz*

1. はじめに

日本語教育でいう「て形」は、初級の始めのほうで教えられることが多い。初級の一日目の授業で、「見てください」「立ってください」「座ってください」「書いてください」「読んでください」「言ってください」「来てください」「行ってください」のように、「て形」を含んだ「要求の語形」を習い、教室内活動における指示とそれに伴った反応が求められ、その場が実際使用となる重要な語形である。

以前にも、「て形の歌」を作成し他の教育機関にも提供し使用していただき、また筆者自身も使っていたが、歌詞について「辞書形」から作り出せるものにしてほしいとの要望があり、今回「辞書形」と「て形」を歌詞に織り込んだものに直し、それに伴い楽曲も少し変更した。

本稿では、学びやすく変更した新しい「て形の歌」について、主にその構成内容の解説を行なうことで使用に当たっての手助けにしてもらいたいと考えている。

2. 「て形」について

「て形」について、日本語教科書の『みんなの日本語(初級 I 本冊)』の第 14 課に「ちょっと 待って ください。」

「ミラーさんは今 電話を かけて います。」(依頼や動作の継続)、『みんなの日本語(初級に II 本冊)』には、「窓が 閉まって います。」「交番に 町の 地図が はって あります。」「旅行の まえに、案内書を 読んで おきます。」などがあり、結果の継続、準備の完了などの表現が学習できる。この教科書で 1 課から順に進んでいくとすれば、後のほうで習うことになる。学習者は、日常生活で「て形」の使用を早い段階で求められるはずなので、もう少し早い段階で学習してもいいのではないかと思える。日本語教科書の『JAPANESE FOR EVERYONE』は、本の初めである第 1 課に「パスポートを みせて ください。」などの例文や練習問題があり、リクエスト(polite requests)の勉強ができる。

学校文法では、動詞や形容詞の連用形(五段動詞では音便形)に助詞の「て」を加えたものという扱いで、「て形」とは呼んでいない。鈴木康之(1977)は『日本語文法の基礎』の中の動詞のアスペクトに言及している。持続相・結果相・終結相の項目で、「かいている」「しんでいる」「おいである」「よんでしまう」などについて説明し、さらに「やりもらい」と「もくろみ」の項目でも「て形」を含んだ表

* 近畿大学工業高等専門学校

総合システム工学科(共通教育)教授

現「太郎が 花子に 本を かってやった。」「開店したばかりの みせで セーターを かってみた。」などを提示している。鈴木康之は、「かいている」「かいていた」など全体を動詞ととらえているところが学校文法とは大きく違う。

日本語教育においても、学校文法のように「かいている」を「動詞の連用形+助詞+助動詞」というように分解して学習者に教えることは得策ではない。高橋太郎他(2005)の『日本の語文法』では「て形」にあたるものを「第二中止形」、鈴木重幸(1972)の『日本語文法・形態論』では「第二なかどめ」と呼んでいる。

「東京外国語大学言語モジュール」(2015年11月15日アクセス)の文法モジュール Step1: V て(て形)に作り方が示してある。そこには、動詞の「辞書形」と「て形」を示している。次のとおりである。

<グループ1> 「かう→かって、まつ→まって、つくる→つくって」、「しぬ→しんで、あそぶ→あそんで、よむ→よんで」、「かく→かいて」、「およぐ→およいで」、「はなす→はなして」

<グループ2> 「おきる→おきて、たべる→たべて」

<グループ3> 「する→して、くる→きて」

「て形」を含んだ日本語表現には、前述したように多くのものがある。丁寧な要求をするときの「～てください」、アスペクトやヴォイスに関して、継続や何かが起きた結果・状態を表す「～ている」「～しまう」「～ておく」「～てある」、サービスの方向を示す「～てやる」「～てもらう」「～てくれる」、他にも「～ていく」「～てくる」「～てみる」「～てみせる」など多様である。このように「て形」を使って表現するものは多く、学習者にとって大事な学習項目である。

3. 「て形の歌」について

3. 1 概要

以前に作成した「て形の歌」は、「辞書形→ます形→て形」という順番に歌詞を構成していた。「ます形」も「て形」も同時に覚えられるのでいいようだが、「辞書形」を「ます形」にしてから「て形」にするというのでは手間取ってしまう。「て形」と「ます形」を別々にするほうが学習しやすいと考え、今回は「辞書形→て形」とした。

また、以前の歌詞には「(い・ち・り) →って」「(み・び・に) →んで」などのように「ます形」から作り出す方法を歌詞に含めていたが、ます形の説明を間に挟むことになり煩雑になり、それは省いた。また、「東京外国語大学言語モジュール」に提示の「(う・つ・る) →って」「(ぬ・ぶ・む) →んで」などの「辞書形」から「て形」を作る方法を短くしたのも歌詞には含めなかった。

この「て形の歌」も「日本語教育のための音楽教材」として作成しており、歌とカラオケのCD、歌詞シート、クイズシート、パワーポイント(歌詞とクイズ)、楽譜によ

る教材セットとなっている。教材の実際の内容をそのまま使えるよう、本稿にも次のように歌詞シート・クイズシート・楽譜を提示する。

APPENDIX-1 → 歌詞(ローマ字付き)

APPENDIX-2 → 歌のクイズ

APPENDIX-3 → 楽譜

3. 2 「て形の歌」の歌詞について

「て形の歌」で扱っているのは、全て動詞である。歌詞1番にはグループI(五段動詞)を、歌詞2番にはグループII(一段動詞)とグループIII(サ変動詞・カ変動詞)を使って作成している。

歌詞中には、「て形」の前に「辞書形」を提示した。これは、基本となる単語が辞書に載っているわけであり、そこからどのように作られるかをわかりやすくするという意図がある。歌詞シートにもクイズシートにも、ひらがなにローマ字を併記し、動詞の語幹と語尾などの構造上の関係を理解しやすくしている。したがって、学習者はクイズシートにあるクイズを行なうことで、「て形」の作り方を学ぶことができる。

次に「て形の歌」の歌詞を提示する。ただし、●の後の【 】の中は歌詞ではなく歌う部分ではない。

●歌詞1番

<♪1> 動詞グループI

- 【いて】
 - ・[かく] かいて ください。
(Kak-u. **Ka-i te** kudasai.)
- 【いで】
 - ・[ぬぐ] ぬいで ください。
(Nug-u. **Nu-i de** kudasai.)
- 【して】
 - ・[はなす] はなして ください。
(Hanas-u. **Hanas-i te** kudasai.)
- 【って】
 - ・[いく] いって ください。
(Ik-u. **I-t te** kudasai.)
 - ・[たつ] たって ください。
(Tat-u. **Ta-t te** kudasai.)
 - ・[とる] とって ください。
(Tor-u. **To-t te** kudasai.)
 - ・[あう] あって ください。
(A-u. **A-t te** kudasai.)
 - ・[いう] いって ください。
(I-u. **I-t te** kudasai.)
- 【んで】
 - ・[しぬ] しんで います。
(Sin-u. **Sin-de** imasu.)

- ・[よむ] よんで います。
(Yom-u. **Yon-de** imasu.)
- ・[あそぶ] あそんで います。
(Asob-u. **Ason-de** imasu.)
- ・[よぶ] よんで います。
(Yob-u. **Yon-de** imasu.)

歌詞1番の中で採用した動詞は、「て形」の最後が、【いて】【いで】【して】【って】【んで】になるものをそれぞれまとめて表示している。前半「かく」「ぬぐ」「はなす」「いく」「たつ」「とる」「あう」「いう」の8つの動詞は、「て形」を丁寧な依頼の表現「～てください」(例「かいてください」「ぬいでください」など)の中で表している。後の4例(「しぬ」「よむ」「あそぶ」「よぶ」)は、それらの「て形」を「～ています」という継続や結果の状態を表す表現で歌詞が作られている。

歌詞で扱った動詞だけではなく、他の動詞に当てはめられるように、ルールとして考えてみると次のようにまとめることができる。

(1)て形の終わりが【いて】となるもの

辞書形が「く」で終わるもの(語幹の最後が「k」のもの)は「～いて」(例:かいて)となる。

(2)て形の終わりが【いで】となるもの

辞書形が「ぐ」で終わるもの(語幹の最後が「g」のもの)は「～いで」(例:ぬいで)となる。

(1)と(2)の二つを歴史的な変化で見ると「かきて、

kak-ite」「脱ぎて、nug-ide」だったものの語幹の最後の子音「k」「g」がなくなり、「かいて、ka-ite」「ぬいで、nu-ide」となったもので、国語教育などでは音便と呼ばれる。

(3)て形の終わりが(五段動詞で)【して】となるもの

「はなす」の場合、語幹が「hanas」であり、それに語尾「ite」が付き、「hanas-ite」と語形変化したものである。江口他の『天草本平家物語資料大系』(2005)によると室町時代末期は、語幹の最後が「s」の五段動詞も、語幹最後が「k」や「g」の動詞と同じく「s」が脱落し、「fanas-u」が「fana-ite」のように発話されていたものだが、現在は「hanas-ite」となり、もとに戻ったような形となった。

(4)て形の終わりが【って】となるもの

次の「いく、ik-u」「たつ、tat-u」「とる、tor-u」「あう、a(w)-u」「いう、i(w)-u」は、以前の「て」がついた形は「いきて、ik-ite」「たちて、tat-ite」「とりて、tor-ite」「あいて、a(w)-ite」「いいて、i(w)-ite」だったものが、語幹最後の子音と語尾の「i」の部分が、促音「t」に変化し、「いって、itte」「たって、tatte」「とって、totte」「あって、atte」「いって、itte」となったと考えられる。語幹の最後が「t」「r」「(w)」となるグループI(五段)の動詞は、「て形」が「～って」となることが学べる。ただし、「行く」の語幹最後

は「k」であるが、これは「て形」が「～って」となる。

(5)て形の終わりが【んで】となるもの

グループI(五段)の動詞で辞書形が「しぬ、sin-u」「よむ、yom-u」「あそぶ、asob-u」「よぶ、yob-u」は、かつての「て形」が「しにて、sin-ite」「よみて、yom-ite」「あそびて、asob-ite」「よびて、yob-ite」だったものが、現在では「しんで、sin-de」「よんで、yon-de」「あそんで、ason-de」「よんで、yon-de」となったものである。辞書形からの作成の方法として見てみると、語幹最後が「n」となる五段動詞は、語幹に語尾の「de」をつけて「て形」を作り、語幹最後が「m」「b」の場合は語幹最後の「m」「b」を「n」に変えそこに語尾の「de」をつけて作られると説明できる。

■歌詞2番

く♪2> 動詞グループII・III

① 動詞グループII

- ・[みる] みて います。
(Mi-ru. **Mi-te** imasu.)
- ・[かりる] かりて います。
(Kari-ru. **Kari-te** imasu.)
- ・[ねる] ねて います。
(Ne-ru. **Ne-te** imasu.)
- ・[たべる] たべて います。
(Tabe-ru. **Tabe-te** imasu.)

② 動詞グループIII

- ◆Q: なにを して いますか。
(Nani o **s-ite** imasu ka.)
- A: さんぽ して います。
(Sanpo **s-ite** imasu.)
- [する] して。 [する] して。 しています。
(S-uru) (**S-ite**.) (S-uru) (**S-ite**.) (**S-ite** imasu.)
- ◆Q: なにが きて いますか。
(Nani ga **k-ite** imasu ka.)
- A: とりが きて います。
(Tori ga **k-ite** imasu.)
- [くる] きて。 [くる] きて。 きて います。
(K-uru. **K-ite**.) (K-uru. **K-ite**.) (**K-ite** imasu.)

歌詞2番は、グループIIの動詞(一段動詞)とグループIII(サ変動詞・カ変動詞)である。「て形」を「～ています」の表現の中で採用し、後半のグループIIIのほうでは、「Q: なにをしていますか。 A:さんぽしています。」「Q:なにがきていますか。 A:とりがきています。」と問答形式の歌詞にしている。

動詞グループIIの初めのほうは、辞書形が「みる mi-ru」「かりる kari-ru」であり、語幹の最後が母音「i」のもので、「て形」が「みて mi-te」「かりて mi-te」となる。その次の歌詞は、語幹の最後が母音「e」になるもの「ねる、

ne-ru」「たべる、*tabe-ru*」で、「て形」が「ねて、*ne-te*」「たべて、*tabe-te*」となる。グループⅡの動詞をて形にするには、語尾を「て、*te*」にかえるだけ（語幹+て）なので、学習者にとっては作りやすい。

歌詞2番の後半はグループⅢの動詞(サ変動詞・カ変動詞)である。動詞「する、*s-uru*」の語幹「*s*」に語尾「*ite*」をつけて、「て形」の「して、*s-ite*」を作り、動詞「くる、*k-uru*」の場合は、語幹「*k*」に語尾「*ite*」をつけて「て形」の「きて、*k-ite*」を作る。

3. おわりに

本稿で扱った「て形の歌」は、2015年7月に「日本語教育のための音楽教材」として作成したものである。2015年版の「て形の歌」を改訂版として使っていただきたいと考えている。

前述したように、「て形の歌2004年版」とは異なり、「ます形」を「辞書形」と「て形」の間に挟んだ歌詞ではなく、「辞書形」の次に「て形」を提示しているので、「辞書形」と「て形」の関係が分かりやすいと思われる。言い換えると、動詞の「辞書形」からどのように「て形」が作れるかが学べる。正確に言うと「辞書形」がどのような形であるかで、「て形」は何かということがわかるというほうがいだろう。なぜなら、「て形」は歴史的な変化があって現在のような語形になったのであり、「辞書形」から作られてこのようなものになったわけではないからである。以前の「て形」である「かきて、*kak-ite*」「のみて、*nom-ite*」などが、現在の「て形」である「かいて、*ka-ite*」「のんで、*non-de*」に変化したと言うほうが正確である。

しかしながら、日本語の学習初級者にこのような言語学上の内容を詳しく説明しても、現実の言語学習の問題としてあまり機能をなさないと思われる。ただし、教える側としてこのことを認識してもらいたいと望む。

この改訂版の「て形の歌」は、OXFORD(1990)の言う学習ストラテジーの中の情意ストラテジーや記憶ストラテジーとして機能していると考えられる。授業活動やセルフスタディーなどの機会に、楽しく覚える教材としては是非使用していただきたい。

参考文献

- 1) 江口正弘・溝口博幸(2005)、『天草本平家物語資料大系』CD-Rom版、尚文出版
- 2) 鈴木重幸(1972)、『日本語文法 形態論』pp265-268、pp329-347、pp373-400 むぎ書房
- 3) 鈴木重幸(1977)、『日本語文法の基礎』pp67-89、三省堂
- 4) 高橋太郎 他(2005)、『日本語の文法』pp61-64、pp79-110、ひつじ書房

- 5) 溝口博幸(2008)、「楽しく学べる文法学習のための音楽教材」日本語教育学世界大会 2008(韓国) <第7回日本語教育国際研究大会> 予稿集1、pp235-238
_____ (2009)、「楽しく学べる文法学習のための音楽教材(2)」、JSAA-ICJLE2009 国際研究大会(オーストラリア)、要旨 p203
_____ (2011)、「歌を使った日本語教育の方法」、『跨文化交際の日本語教育研究2(異文化コミュニケーションのための日本語教育)』(第10回世界日本語教育研究大会: ICJLE 2011 China) pp293-294、高等教育出版社(中国)
- 6) 『みんなの日本語』(1998)、初級I本冊 pp114-121、初級II本冊 pp68-75、pp86-91、pp118-125、pp128-135、スリーエーネットワーク
- 7) 東京外国語大学(2015年11月15日アクセス)、「東京外国語大学言語モジュール」、Sep1:V て(て形)、<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/ja/>
- 8) OXFORD, Rebecca(1990) “Language Learning Strategies What Every Teacher Should Know”, Newbury House (A Division of Wadsworth, Inc.)、『言語学習ストラテジー(外国語教師が知っておかなければならないこと)』 穴戸通庸・伴紀子 訳、凡人社(2001)
- 9) NAGARA, Susumu et al(1990)、“JAPANESE FOR EVERYONE”、pp20-29、pp166-175、pp200-209、Gakken

謝辞

思い起こせば2004年の立命館アジア太平洋大学常勤講師時代に同僚の日本語教員に作成を勧められ、「日本語教育のための音楽教材」1作目である「て形の歌」を作成したのであるが、その時から連続してDarby STANDS氏には最終段階の曲アレンジやミキシング、CD作成をお願いしている。ともに作成した作品には立命館アジア太平洋大学5周年記念ソング Ritsumeikan Asia Pacific University 5th anniversary Songs 中の1曲「ぼくらはなぜ」(2004)もある。今回のリメイク版の「て形の歌」も作詞・作曲・歌は筆者であるが、アレンジやミキシングなどはSTANDS氏にお願いした。また、この研究に対し近畿大学工業高等専門学校より別枠研究費として助成していただいた。両者に感謝申し上げる。

けい うた
て形の歌 *Te-form Song*

動詞(どうし)グループ I

[かく]⇒ かいて ください。
Kak-u. Ka-i te kudasai.



[ぬぐ]⇒ ぬいで ください。
Nu g-u. Nu-i de kudasai.



[はなす]⇒ はなして ください。
Hanas-u. Hanas-i te kudasai.



*[いく]⇒ いって ください。
I k-u. I-t te kudasai.



[たつ]⇒ たって ください。
Ta t-u. Ta-t te kudasai.



[とる]⇒ とって ください。
To r-u. To-t te kudasai.



[あう]⇒ あって ください。
A-u. A-t te kudasai.



[いう]⇒ いって ください。
I-u. I-t te kudasai.



[しぬ]⇒ しんで います。
Si n-u. Si-n de imasu.



[よむ]⇒ よんで います。
Yo m-u. Yo-n de imasu.



[あそぶ]⇒ あそんで います。
Aso b-u. Aso-n de imasu.



[よぶ]⇒ よんで います。
Yo b-u. Yo-n de imasu.



かん そう
(間 奏 Interlude)

動詞(どうし)グループ II

[みる]⇒ みて います。
Mi-ru. Mi-te imasu.



[かりる]⇒ かりて います。
Kari-ru. Kari-te imasu.



[ねる]⇒ ねて います。
Ne-ru. Ne-te imasu.



[たべる]⇒ たべて います。
Taberu. Tabe-te imasu.



動詞(どうし)グループ III

なにを して いますか。
Q: Nani o **s-i te** imasu ka.

さんぽ して います。
A: Sanpo **s-i te** imasu.



[する]⇒ して。 [する]⇒ して。
S-uru. S-i te. S-uru. S-i te.

して います。
S-i te imasu.

なにが きて いますか。
Q: Naniga **k-i te** imasu ka.

とりが きて います。
A: Toriga **k-i te** imasu.



[くる]⇒ きて。 [くる]⇒ きて。
K-uru. K-i te. K-uru. K-i te.

きて います。 ハイ!
K-i te imasu. Hai!

けい うた
て形の歌 *Te-form Song*

動詞(どうし)グループ I

[かく] ⇒ か()ください。
Kak-u. Ka() kudasai.



[ぬぐ] ⇒ ぬ()ください。
Nu g-u. Nu() kudasai.



[はなす] ⇒ はな()ください。
Hanas-u. Hanas() kudasai.



* [いく] ⇒ い()ください。
I k-u. I() kudasai.



[たつ] ⇒ た()ください。
Ta t-u. Ta() kudasai.



[とる] ⇒ と()ください。
To r-u. To() kudasai.



[あう] ⇒ あ()ください。
A-u. A() kudasai.



[いう] ⇒ い()ください。
I-u. I-() kudasai.



[しぬ] ⇒ し()います。
Si n-u. Si() imasu.



[よむ] ⇒ よ()います。
Yo m-u. Yo() imasu.



[あそぶ] ⇒ あそ()います。
Aso b-u. Aso() imasu.



[よぶ] ⇒ よ()います。
Yo b-u. Yo() imasu.



かん そう
(間 奏 Interlude)

動詞(どうし)グループ II

[みる] ⇒ み()います。
Mi-ru. Mi-() imasu.



[かりる] ⇒ かり()います。
Kari-ru. Kari-() imasu.



[ねる] ⇒ ね()います。
Ne-ru. Ne-() imasu.



[たべる] ⇒ たべ()います。
Taberu. Tabe-() imasu.



動詞(どうし)グループ III

なにを () いますか。
Q: Nani o s() imasu ka.

さんぽ () います。

A: Snpo s() imasu.



[する] ⇒ ()。 [する] ⇒ ()。
S-uru. S() S-uru. S()

() います。
S() imasu.

なにが () いますか。
Q: Naniga k() imasu ka.

とりが () います。

A: Toriga k() imasu.



[くる] ⇒ ()。 [くる] ⇒ ()。
K-uru. K() K-uru. K()

() います。 ハイ !
K() imasu. Hai !

けい うた
て形の歌

Te-form Song

作詞・作曲：Mizo.

♩=130

1 D 2 D 3 A7 4 A7 D

5 D 6 D 7 A7 8 A7

9 D 10 D 11 A7 12 A7 D

13 D 14 D 15 A7 16 A7

17 D 18 D 19 A7 20 A7 D

21 G 22 F#m 23 G 24 D

25 D 26 D 27 A7 28 A7 D

[かく]かいてーください [ぬぐ]ぬいでーください
[はなす]はなしてーください [いく]いってーください
[たつ]たってーください [とる]とってーください
[あう]あってーください [いう]いってーください
[しぬ]しんでいます [よむ]よんでいます
[あそぶ]あそんでいます [よぶ]よんでいます

29 D 30 D 31 A7 32 A7

33 D 34 D 35 A7 36 A7 D

37 D 38 D 39 A7 40 A7

[みる]み ー て います [かりる]かりて います

41 D 42 D 43 A7 44 A7 D

[ねる]ね ー て います [たべる]たべて います

45 G 46 F#m 47 G 48 D

なにを して いますか さんぼして います
 なにが きて いますか とりがきて います

49 D 50 G 51 A7 D 52 A7 D

[す ーる]し ー て [す ーる]し ー て しています
 [く ーる]き ー て [く ーる]き ー て きています ハイ!